

泳いで渡って船でバトル

かつての面影を一切感じさせない、地理的には新宿があったはずの場所に広がる海の上に、一隻の船があった。

観光用のフェリーほどの大きさのその船の中で、研究員は採取した海水を調査している。

「これは海水というよりは淡水だな」

「教授！ 先程採取した海水の一部が消失しています！」

「消失したのは一部か……。間違いなく密閉していたはずだが。淡水で原因不明に消失する海水……我々の常識的にはありえない何かが起きている、ということは間違いないようだな」

「2013年の新宿区は海になっているの」

東城・リリカ（デーモンのレジェンドウィザード・g01222）が「TOKYO エゼキエル戦争」と呼ばれる「2013年の新宿」の状況を説明する。

「ここではアークデーモンと大天使が新宿以外の 22 区を支配してるんだけど、新宿に隣接する文京区の大天使が新宿の海の調査を行おうとしているみたいなのよね」

「調査したことで私たちのいる新宿島にすぐ悪影響があるとは思えないけど、放置するわけにもいかないわ」

「新宿の海に侵入してきている文京区の大天使を撃退し、新宿の海の調査を諦めさせる事。これが今回の作戦の目的ね」

TOKYO エゼキエル戦争における新宿区はすべてが海となっているから、パラドクストレインは大天使の探査船からある程度離れた海上に出現するわ。

目的地である探査船までは、ディアボロス自身で泳いで向かう必要があるの。

「海から探査船に泳いでくる侵入者」は警戒されていないので発見される可能性は高くはないし、近づくまではリラックスしても大丈夫だと思う。せっかくだから海水浴楽しんだらいいんじゃないかしら。近づいた後はある程度慎重に接近して船内に入り込んで。

探査船にいる敵は2種類。トループス級のクロノヴェーダ「ガーゴイルガンナー」アヴァタール級のクロノヴェーダ「マキナエンゼル」ね。

「マキナエンゼル」は光の剣、光の翼、電撃の3種類の攻撃を使い分けてきて、リーチも属性も豊富ね。ある意味ではシンプルな力比べになるかもしれないから、油断せず戦いましょう。

「マキナエンゼル」がこの探査船を仕切るリーダーだから、これを倒せば作戦は成功よ。それまでに倒してなかった「ガーゴイルガンナー」がいたら彼らは撤退するでしょうね。

「ガーゴイルガンナー」は「マキナエンゼル」と比較すると弱いから一体一体に対して苦戦はしないと思うわ。とはいえ、同時に相手にするのは少し面倒ね。

「マキナエンゼル」を見つけるまでの間に見つからないようにして戦闘を回避すれば消耗を抑えられるし、予め各個倒しておいて憂いなくマキナエンゼルと戦うのもありだと思う。

「ガーゴイルガンナー」は複数体で船内を警備しているの。必然的に初期配置として警備が濃い場所にマキナエンゼルはいると思うから、その辺りがヒントになるかしらね。

もちろん、無視するっていうのもやってできないことはないでしょうから、あなたたちに任せるわ。

敵を撃破したら調査の続行はもう無理だから、探査船は撤退を始めるわ。

ただ「マキナエンゼル」との戦いの余波と実験道具、調査道具の兼ね合いで船が沈没する可能性が高いと思う。

船が沈没しちゃったら一般人の研究者の命が危ぶまれるわね。みんなは大丈夫だろうけど、船のダメージをコントロールして、沈没を回避して乗員のみんなを助けてあげて。

探査船はそれなりにしっかりした船だから、探せば一通りの道具は揃っているはず。うまいことやってほしいわ。

「初めてで緊張する人も多いかもしれないけど、あなたたちなら、出来ることを確実にやっていけば目的は達成できるはずよ。探査船に近づくまではちょっとした海水浴って趣だし、適度にリ

ラックスしてやりきって頂戴。頼んだわ！」

探査船に乗り込んでいる大天使「マキナエンゼル」は、その機械の手で研究者の報告書に目を通していた。

「新宿区が海になった現象は謎が多い。人間の研究者が役に立つかはわからないが、今は彼らに調査させるしかない」

「一刻も早くこの現象を解明しないことには我々の未来はない……。この度の調査で、何か有益な情報を持ち帰れば良いのだが。……うむ、やるしかあるまいな」

●海水浴

「TOKYO エゼキエル戦争」と呼ばれるディヴィジョン、2013年の新宿にディアボロスたちは辿り着いた。そこに広がるのは海だ。目的地はこの海を研究しているクロノヴェーダのいる船である。そこまでは泳いでいくほかない。

「なんか半端に見慣れた景色なので混乱しますね」

ミセラ・アルマータ（不可逆的魔法少女・g02322）は周囲を見渡して言った。「新宿の海」から薄っすらと見える陸地は見知った東京のそれとほぼ一致していたからだ。

「学校も色々、水着も色々だね」

野口・真裕美（"ソティラス"・g03646）はミセラの水着を見て言う。ミセラの水着はいわゆる"水抜き"のあるスクール水着、俗に言う「旧スク」だ。色は照りつける太陽に負けじと輝く白。

（水着の女の子と一緒に海水浴か。ちょっと緊張はするな）

真崎・冬弥（妖魔五剣・g02934）は準備運動をしながらミセラと真裕美に視線をやる。真裕美の水着はいわゆる「競スク」と呼ばれるものだ。年齢に見合わず豊満な胸部は、水着のシンプルさゆえに目に入ってしまうのだった。

「北海道だともうこれくらいの時期は海で泳ぐには冷えるもんだけど、東京はまだまだ楽しめるんだな」

悪魔と戦うのだ、という緊張、年頃の男子としての緊張、それらを直視しすぎないよう、冬弥

はリラックスすることを意識する。

「私たちの知ってる海じゃない、けど……サメとかはいない、よね……？」

雛並・ひなみ（老舗パン屋の看板娘・g01350）は周囲を警戒する。

「泳ぐことについては問題なさそうだな」

勅使河原・葵（地獄を知る者・g00520）は海を見渡して答えた。

事前の情報通り大きな危険はないようだった。

「と言っても、俺は水着とか持ってねえんだよな……」

色とりどりの水着を用意していたディアボロスたちを見て葵は少し羨ましそうにする。

「しゃーねーから上着だけ脱いで泳ぐか」

葵は上着を脱いで泳ぎだす。念の為と光学迷彩を用いる。流されないように気をつけて、ある程度の距離になったら潜ればいい。

「海水浴、連れてこられたことはなかったから初、ってことになるのかな……」

水着姿を見られるのが恥ずかしいのか、ひなみもこそこそと泳ぎだす。

（ちゃんと泳げる。体育の授業真面目に受けててよかった……）

音を立てないように気をつけよう、と慎重に、目的地への情報収集も兼ねつつ、感慨深げにひなみは進みだした。

「せっかくだし、雑談しながら泳いでこっか」

真裕美の声に対応するように、冬弥とミセラも泳ぎだす。

ミセラは背泳ぎで、冬弥は2人とスピードを合わせられるよう平泳ぎで泳ぎだした。

安全だとは言え見つからないように、目的の船へ取り付くための情報収集も欠かさず、かつ英気を養うために海水浴そのものを楽しむ。

ディアボロスたちは全く隙がなく、完璧な形で船へと近づくことに成功した。

●船への取り付け

各々慎重に、楽しく泳ぎ辿り着いた先に一隻の船があった。

「この船で間違いない、ですよね」

ミセラは目に入った観光用フェリーほどの大きさの船を指差す。

「リリカさんが言ってたのと同じ、間違いない」

ひなみが同意した。

「今は進んでるわけではないみたいだな」

「置いていかれることはとりあえずなさそうか」

葵と冬弥は船と自分たちの相対的な位置取りに変化がないことを確認する。

「見える範囲では警備は船頭のほうが多そうかな」

真裕美は甲板に目を凝らして言う。

「射手が警備にいと聞いていたが、外向きに大量にいとかではないんだな」

冬弥は悪い方向に想定していた事態ではないらしいことを確信し、少し安堵する。

「進行方向のほうが危険だもんね……？」

「"泳いでいる人間"への警戒が薄いだけって可能性もあるかもな。上空のほうが警戒されてたりとか。船ならわかりやすいが、泳いでくるやつを警戒するってのは理屈ではわかってても本能的には難しいだろうな」

「数じたいがそこまでいないのは、それだけボスの護衛が大事ってことかな？」

ひなみと葵と真裕美も状況を踏まえて分析する。

「じゃあ、船尾から取り付きますか？」

ミセラが提案する。

「どれも間違いなさそうだ。場所はとりあえず船尾からがいいだろうな。異論はあるか？」

冬弥が周囲に提案する。

「状況が変わったら臨機応変に、っていう前提だが、いいんじゃないか」

葵が同意した。

「……うん、いいと思う」

「いいと思います」

ひなみ、ミセラも同意する。

「私も文句なし！」

真裕美も同意した。

「よし、じゃあそろそろいくか。【光学迷彩】を使えるやつは全員使う、なるべく潜って行って、よほどの悪い状況じゃなかったら船尾から取り付く。いくぞ！」

冬弥の掛け声に応じて、ディアボロスたちは進みだした。

(無理やり従わされてる一般人は助けないと)

この戦いへの決意、意義を噛み締めながら進む。

「ここが敵さんのいる場所か」

「無事着けて、よかった……」

「ここからが本番だね！」

「がんばりましょう」

元より大きな危険はないと言われていた情報に加え、しっかりとした対策を行っていたディアボロスたちは難なく取り付くことに成功した。

ボスであるマキナエンゼルを倒すため、協力させられている一般人の解放のため、そして新宿島の平和を守るための戦いが始まろうとしていた。

●マキナエンゼルの気づき

ディアボロスが船に取り付いたその頃、探査船の主であるマキナエンゼルは警備のガーゴイルガンナーを呼び出していた。

「異常はないか」

「はっ！ これとってありません！」

「そうか」

(であれば、この胸騒ぎ、気のせいということだろうか……)

いわゆる「虫の報せ」のようなものをマキナエンゼルは感じ取っていたが、それが何かハッキリとは掴むことができていなかった。

「海水の異常、研究者の様子の変化、侵入者……なんでもいい、何か気づいたらすぐ報せるのだぞ」

「はっ！ 任されました」

「よいか、決して一人で解決しようなどと思うな。報告し、相談し、連絡するのだ。決断し処理するのは我だ。良いな」

「はっ！」

ガーゴイルガンナーは敬礼し、部屋を後にする。

「一刻も早く、この謎を解かねばならぬのだ。我々の未来のために。もしゴミが入り込むのなら、その始末をするのが私の仕事というものだ。やるしかないのだ……」

マキナエンゼルは自慢の二本の剣に目をやり、決意を新たにすのだった。

●侵入、情報収集

ボスであるマキナエンゼルから、いわゆる「ほうれんそう」を改めて叩き込まれたガーゴイルガンナーは、指示されたことを同じく警備をしている同僚へ漏れなく伝えていた。

「ゴミは見逃さんぞ」

その意気やよし、警備についての意識は高まっている。

一方で「現場に忍び込んだ敵」に対しての練度は高くはない。未だにガーゴイルガンナーたちは侵入者の存在に気づくことができずにいた。

その状況下で乗り込んだディアボロスの一団は、後に始まるであろう激戦に備えて船のダメージを調整しようとしていた。

真崎・冬弥（妖魔五剣・g02934）は船内のトイレで用を足していた一般の研究員を捕まえると一撃で気絶させ、個室へ連れ込む。

冬弥が傷の治療をすることで研究員は目覚めた。研究員は記憶を手繰り叫ぼうとする。が、目の前の刀を見て躊躇した。

「オレ達は誰一人として死なせたくない。頼む、君達の命を救わせてくれ」

自分の命を奪おうとしている人間に救ってくれと言われて一瞬混乱した研究員だったが、冬弥の真剣な表情に観念した。元より、命の危機を前にしても成り立つほどの大天使たちへの強い忠誠心があったわけでもない。

「船の見取り図は入り口にある案内板を見ればわかるはずだ。脱出艇はあそこであって、研究室は……」

ディアボロスが聞き出そうとしていた内容については漏れなく聞き出すことに成功した。

「さて、無事に侵入できましたし、いきましょう」

須藤・霧衣(リクリエーションズ・g00461)は冬弥から受け取った情報を元に動き出していた。

「脱出艇はあそこですね」

戦闘が始まっていざ逃げ出そうとなった時、研究員を逃がすための導線を意識しながら動く。

一研究員が知っている「船が弱っている箇所」という情報は大したものではなかったものの、研究室や調理場などの位置情報で被害が広がりそうな場所を想像することは容易だった。

「撤退されたとしても、手ぶらで帰らせれば間違いないでしょう」

さらに霧衣は隙なく臨機応変に補修を進めていく。さらに、目ざとく研究資料を見つけた際は隙を見て捨てていった。

「問題なし。可能な限り頑強に補強しておきましょう」

手際よく、警備の目や研究員の目を盗みながら霧衣は資料の処理と補修を進めていく。

「万が一を起こさせないのが私の仕事ですからね」

後の戦闘に備えた準備は順調に進んでいた。

●警備するガーゴイルガンナーとの戦い

船のダメージをコントロールしようと別部隊が動いているのと同時に、警備を排除しようと動いていたディアボロスたちがいた。

「先行した皆さんのおかげで、潜入が楽にできましたね。ありがたいことです」

白河・セーラ（不退天閃騎・g02612）は船内を隠れながら進む。

「……いましたね」

警備に動いていたガーゴイルガンナーを見つけた。その数1体。

「可能な限りクロノヴェーダは逃したくないので、一体ずつ確実に仕留めていきましょうか」

セーラは狙いを定め、小声で唱える。

「導き示して穿く我が意、ここに示さん！」

飛ばした槍はガーゴイルガンナーを突き刺した。が、仕留めきることはできなかった。

「侵入者……！ 伝えねば！」

瀕死のガーゴイルガンナーは、侵入者の報告をしようと気力を振り絞る。進むはセーラとは逆方向だ。

仕留めきれなかったら突撃してくるだろうからそこを叩き落とそう。そう考えていたセーラは不意を突かれた形となっていた。

「させません！」

だが、状況を認識しなおすと、セーラはもう一度槍を放った。二度目の槍を受け、ガーゴイルガンナーは息絶えた。

一息つき、改めてセーラは索敵に戻る。もう油断はしない。一体ずつ確実に仕留めていこうと考えながら。

「正直あたしこういうの苦手……」

野口・真裕美（"ソティラス"・g03646）は隠れながら進んでいた。

派手に暴れることのほうが性に合っている……。そう思いながら。

「まあ、やることはやるけどね」

視線の先にいるガーゴイルガンナーを見つけると、落ちていたバールのようなものを拾い上げ後頭部を一撃で叩いた。

「……！？」

不意を突かれた上に想像もしないタイプの打撃を受けたガーゴイルガンナーは次の一手を繰り出すことができない。

「ストリートでも戦場でも、必要なら躊躇いなく、ね」

勝つことにコミットした真裕美の戦術は美しいとは言い難いものではあったが、しかし限りなく有効だった。

「よし、見つかってないね。次！ 次！」

この調子で一体一体仕留めていけばいい……。真裕美は調子よく船内を歩き続けるのだった。

「ヒューッ！ あいつらいいジャケット着てるな」

勅使河原・葵（地獄を知る者・g00520）はガーゴイルガンナーを正面に捉え関心する。深緑のジャケットに鉄砲を携えるガーゴイルガンナーは敵ながらなかなか締まったファッションであると言えた。

幸い見つかっていなかったことから、死角となる場所に移動し通過するのを待つ。その間近くにあるものを注意深く見ていた。

錨を見つけた葵は通過するタイミングでそれを投げつける。一瞬の閃きで行ったその行動に意表を突かれたガーゴイルガンナーは倒れてしまった。

その後形成有利となった葵は一方的に戦闘を進め、一言も喋らせることなく難なく勝利することに成功した。

「さて、泳いだきた時に脱いできちまったし、ジャケットいただくとするか」

勝ちを確信した葵は、ガーゴイルガンナーの着ていた服を回収しようと手を伸ばす。

「やっぱり、やめとこう」

自身でボコボコにしてしまった服は汚れと皺と破れでまみれてしまっ「いいジャケット」と

は言い難い状態となっていたのだった。

「よし、次！ 一般人を巻き込まないように注意しないとな」

死んでも復活させればいい、というわけにはいかないのだ。

そのような形で順調に一体一体警備を片付けていた結果、警備部隊殲滅を目的としたディアボロスたちの進撃は滞りなく進み、いよいよ残すはボスであるマキナエンゼルのみ、となっていた。

●沈没回避への準備完了

「私は……戦いに巻き込まれて船が沈まないようにしなきゃ」

雛並・ひなみ(老舗パン屋の看板娘・g01350)は共有された情報を元に船のブリッジへ向かう。

警備の姿が見えなくなった船内で、スタッフと交流を図っていく。いざという時に船を操舵することができれば……と考えたからだった。その方法、ブリッジの場所などを改めて聞き出していく。

「ブリッジに行くのはやめておいたほうがいい。あそこの奥にある船長室、そこにボスはいるんだ」

研究員は親切に教えてくれた。

ひなみは研究員たちに、これから危ないことが起きること、船が沈む可能性もあることを伝えていく。

「船が……!？」

研究員は驚くが、抵抗の意思は見せない。

逃げる手段や補修の依頼をし、ひなみは去った。

研究員はその後自ら船の補修、危ない道具の処理を行っていった。抵抗できない相手から沈む可能性を示唆されれば、それを回避するべく動くほかなかった。警備のガーゴイルガンナーの姿が見えなくなっていたこともまた、そういった状況判断に研究員たちを向かわせていった。

「ブリッジで戦うのは危なそうだね……」

ブリッジの近くにマキナエンゼルはいるが、そこで戦うことは船のコントロールを人質に取られているようなものでもあった。

「なら、できることは……」

ひなみは、その情報をディアボロスたちへ共有した。

ブリッジからどうにかおびき寄せ、なるべく広い場所……甲板などがいいだろうか、そういった場所で戦闘をしたほうが良さそうだ、と。その後に、ブリッジへ誰かが行けばコントロールの点は問題ないだろう。

このおびき出しさえうまく行けば、警備も排除し事前に補修などの予防をした現状、危険はほぼ去ったと言っていいだろう。

●異変に気づくマキナエンゼル

「……報告が来ないな」

警備からの事前報告が定刻から5分過ぎてもやってこない。

「あれだけ、異常があったら知らせろと言ったものだが……」

虫の報せレベルであった違和感は、もはや確信へと変わっていた。

「仕方ない。邪魔者は排除するしかあるまい」

マキナエンゼルは重い腰を上げ、船長室のドアに手をかけるのだった。

●戦場を巡る攻防

今回の作戦における撃破対象、マキナエンゼルは船長室を出た。

「あ、どうも」

そこで目が合った人間から挨拶を受ける。こんな研究員がいたか？ マキナエンゼルが逡巡した瞬間、須藤・霧衣（リクリエイションズ・g00461）はそこに素早い一撃を与える。

「ふんっ！」

攻撃を受けたことで状況を理解したマキナエンゼルは霧衣の首をめがけ剣を振るい反撃する。

「危ないですね！」

霧衣は咄嗟の判断で身をかわし、致命傷を避ける形で攻撃を受ける。

「一つ付き合ってもらいましょうか。お楽しみはこれからです」

霧衣は間合いを取ると一気に走り出す。目的地は甲板だ。

ブリッジで戦っては、船のコントロールに支障が出る。広い場所で戦えばよいとの共有された情報を受けての作戦だった。

マキナエンゼルは霧衣が去った方向を見て考えた。

(なるほど、そういうことか……)

「我を倒す程度は容易い、更に研究成果まで奪い取ろうということか。これを奪われるわけにはいかんだ。安い挑発だが乗らざるをえんな。我とて船が沈まれては困るからな」

霧衣の攻撃を受け、1対1であれば負けない程度の実力差も認識していた。

数人であっても勝てないことはないはずだ。ギャンブルではあるが、負け戦とまでは断定できない。撤退するにも侵入者を片付けねばならない。

マキナエンゼルは甲板へ向かって進みだした。

もし、既に研究者の多くが懐柔されていること、資料の多くが処理されていること、船の沈没回避のための補強がなされていたこと、そういった情報が届いていたなら、マキナエンゼルの判断は異なったものとなっただろう。例えば、沈没上等で霧衣とブリッジで戦闘したり、逆にブリッジに陣取る戦術だって取れたはずだ。

これを選ばず「挑発に乗らざるをえない」状況となっていたのは、同じくこの作戦に従事したディアボロス達の行動の成果の賜物であると言えた。

●甲板での戦い

霧衣が誘導した先、甲板には既にディアボロスたちが待ち構えていた。

(こいつがさっきの女の協力者か……?)

甲板の上に真崎・冬弥(妖魔五剣・g02934)がいることを確認したマキナエンゼルは、見つか

らないギリギリの距離まで詰め、自身の翼を動かし姿を消した。光の屈折を利用したステルスからの攻撃は有効で、冬弥の首に向かって斬りつけることに成功する。

完全な不意打ち、まず一人仕留めた……。姿を隠しているであろう他の敵を警戒し、マキナエンゼルは冬弥を背にして動き出す。

「人間を侮るなよ天使」

マキナエンゼルが知覚した声は背中、自身が仕留めたはずの人間から発せられたものだった。

「散る椿の花の如く……その首、貫う」

冬弥の刀はマキナエンゼルの首へ向かって斬りつけられた。

「雛並流……酉の型、十倉！」

再び注意が冬弥に向かったところで、知覚していない場所から光の剣がマキナエンゼルへ突き刺さる。

「ふんっ！」

マキナエンゼルは攻撃が飛んできた方向へ雷撃に変化させた刀身を打ち出す。

「ご、ごめんなさい！」

攻撃の主である雛並・ひなみ（老舗パン屋の看板娘・g01350）は思わず謝るが、飛んできた反撃はしっかりと回避し、致命傷とならずに済んでいた。

「さあーって、そいじゃー発かましてやるかーっ！」

同じく知覚されていない死角にいた野口・真裕美（"ソティラス"・g03646）が近づきハンマーで攻撃した。スピードとパワーが乗った一撃はマキナエンゼルにとっての有効打となり、マキナエンゼルの体勢が僅かながら揺らいた。

マキナエンゼルは剣で真裕美に反撃を行うが、仕留めるにはパワー不足だ。

（こんなに敵がいるとはな……警備も出てこないところを見るに、既にやられてしまっているということか）

マキナエンゼルは敵であるディアボロスたちを認め、聞く。

「お前たちは一体、何者なんだ」

「アタシは"ソティラス(救世主)"、知ってても知らなくても構わないけどお前らを片っ端からブチのめす者だ！ メイドのみやげに覚えていきなっ！」

真裕美は威勢よく答えた。その答えは「お前たち」という質問に対しては嘸み合っておらず、情報量としても0と言っていい受け答えだった。

「オラオラオラオラ！」

問答の隙を打つように、勅使河原・葵（地獄を知る者・g00520）が体液を浴びせるかのような勢いで攻撃を打ちこんでいく。

「とっとと相応しい世界に送ってやんよ。手下は先に送ってやったぜ感謝しな！」

マキナエンゼルはその攻撃を受け、剣による反撃を繰り出しつつ、距離を取る。

「……ふん、よくわからんが、威勢がいいことはよくわかった」

（やはり、警備は既に……）

「ならば！」

マキナエンゼルは自前の羽を羽ばたかせ浮上する。

（せめて、自身が目を通した情報、これだけでも持ち帰らねばな）

開けた空に飛翔する。

甲板で戦闘を行っていたディアボロスに虚を突かれ、上昇を許してしまう。

「しまっ……！」

誰かがこぼした声は、ここで途切れた。

「聖なる光は今ここに、導く先は不退転」

上空でマキナエンゼルの逃走、戦場の移動を警戒していた白河・セーラ（不退天閃騎・g02612）によって出現した無数の光の輪が行く手を阻み、それがそのまま逃走を図るマキナエンゼルに直撃した。

「ぐっ……！！」

そして、これが致命傷となり、マキナエンゼルは反撃を行うことができないまま、海へと沈んだ。

「やったか!？」

「やったよね!!」

葵と真裕美が海面を覗き込み様子を伺う。

「私たちの、勝利……ですね」

ひなみが状況を確認しながら、やや照れながら言う。

上空にいて様子を伺っていたセーラも甲板へ降り立ち、宣言する。

「敵の姿は見えません。私達の勝利です」

●ダメージの行方は

「研究員たちは無事だ。船も出火もなければ何もない。今この船で生きているやつは全員無事だし、どこにだって行けるだろう」

甲板でディアボロスたちが戦闘を行っていた中、船のダメージをコントロールし調整した結果がどうであったか、加奈氏・コウキ（妖一刀流皆伝・g04391）が甲板のディアボロスたちに一早く共有した。万が一があればと、コウキは引き続きダメージコントロールや研究員の保護のために動いていたのだった。

出来る限りの準備をした、とはいえ結果的にどうだったか……不安に思っていた甲板で戦闘していた面々もこの報告を聞いて安堵する。

（人間は絶対に守りたい。クロノヴェーダのせいで犠牲になる人間を出したくない）

コウキが心の中で呟く。

今回の作戦で犠牲者なくクロノヴェーダの目論見を潰すことができ安堵したのは、コウキばかりではない。作戦に参加した全てのディアボロスがそう感じたことだろう。

新宿の海を調査しに来た文京区の大天使、その一隻の目論見を、この作戦では完全に食い止めることに成功したのだった。

ディアボロスたちは目の前に広がる「静かな新宿の海」をしばしの間眺めていた。

=====

- 泳いで渡って船でバトル

https://tw7.t-walker.jp/scenario/show?scenario_id=196

- 結果

リプレイ執筆回数:6

成功度:大成功 5、成功 0、苦戦 0、失敗 0、大失敗 0

- 権利表示

『チェインパラドクス』(C) 花倉みだれ/トミーウォーカー

=====